

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26861985

研究課題名(和文)小規模島嶼における看護実践モデル開発 - エスノグラフィによる熟達化プロセスの解明 -

研究課題名(英文)Development of Rural Nursing Practice Model in Remote Islands

研究代表者

森 隆子(Mori, Ryuko)

鹿児島大学・医歯学域医学系・助教

研究者番号：50507126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：小規模島嶼における看護実践モデルの開発を目的に本研究を行った。看護職3名(看護師2名・助産師1名)を対象に、聞き取り調査や資料閲覧・参与観察を方法に用いてデザインを組んだ。環境や他者との関係性において流動的に実践モデルが形成される側面を有していることが分かった。また共通構造として「公と私の曖昧な空間に所属すること」があげられ、境界線上における自らのあり様が看護実践モデルに反映されると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The development of nursing practice models in rural islands was the present study for the purpose. To target nurses 3 people (nurses two - midwife 1 person), it partnered the design used in the process of the investigation and documentation viewing and participant observation interviews. It was found to have a side surface which fluidly practice model is formed in relation with the environment and others. In addition, "it belongs to the public and my ambiguous space" can be mentioned as a common structure, was considered to be their own plight is reflected in the nursing practice model on the boundary line.

研究分野：地域看護学

キーワード：小規模島嶼 看護実践モデル 島嶼空間の構造 曖昧な境界線に生きる身体性

1. 研究開始当初の背景

小規模島嶼における看護実践のあり様は実に多様で流動性が高い。そのような固有性ゆえ、看護実践のあり様についての動態は十分明らかにされてこなかった。対象住民や環境等との相互作用のなかでダイナミックに経験される世界を通して看護実践がいかにして導かれるのか、当事者視点での構造化を図った研究はほぼ皆無である。従来前提とされてきた「主として環境要因から看護職の役割は生成される」「地域における匿名性の欠如は精神上的の課題」といった単一的な枠組みでは、周辺との相互作用の構造を十分に捉えることができず、看護実践モデル生成の動態は、いわばブラックボックス化されていた。

隔絶性・環海性・狭小性を保有する島嶼の文脈において、看護職は、いかなる経験のなかで自らの看護実践モデルを形成していくのだろうか。

2. 研究の目的

小規模島嶼における看護職の内的経験に基づく看護職としての実践・役割形成の動的な構造を明らかにすること (= 小規模島嶼における看護実践モデルの構築) である。またそれを通じて新たな学習モデルを考案する。

3. 研究の方法

【対象】

小規模島嶼で働く看護職 3 名 (看護師 2 名・助産師 1 名) とした。

【データ収集方法】

インタビュー及び資料閲覧、実践場面への参与観察により実施した。観察・インタビュー内容を逐語録等にデータ化し、質的帰納的に分析・統合を行うことでモデル化を図った。RQ は、「島嶼において、看護職のいかなる体験から実践モデルは形成されるか」である。インタビューに際しては、研究内容を説明し、十分なインフォームドコンセントを得た上で行った。

【インタビューガイド・観察の視点】

本研究では、経験のあり様はその人の解釈の仕方によって異なるというスタンスをとる。看護職人生で培われた価値観や個人的な出来事に関するライフ・ストーリーが、解釈の仕方に影響するものと考え、下記 ~ によりインタビューガイドならびに観察の視点を設定した。

看護職は、島嶼においてどのような経験をしてきたか (島嶼における経験)

自分の解釈の仕方をつくってきた経験とそのあり様 (私人/個人としての自己)

自らの看護実践のあり様はどのようにしてつくられたか (看護職としての自己)

【時期】2014 年 12 月 ~ 2016 年 2 月

4. 研究成果

1) 各人の看護実践モデル構築プロセス

【ケース : 看護師 A 氏】

A 氏は、島に唯一の診療所が開設して初めて着任した看護師であった。当初、積極的に地域へ出向き健康管理や健康教育を実践していたが、次第に地域の共同体ルールや論理、健康への考え方といった生態系が見えてくるなかで、「(島の出身者でない)よそ者としての自己」の自覚から、徐々に自らの立ち位置を見失い始めた。やがて A 氏に立ちはだかった“混乱空間としての島嶼”は、A 氏が従来保持していた看護実践モデルの棄却 (書き換え) を余儀なくさせた (もちろん、当人もその選択を受け入れた)。地域での健康管理といった表層的な看護実践を取りやめ、住民として一切の社会活動への参入を辞退した A 氏であったが、地域や患者家族らとの信念対立を経験しながらも、家族看護を核とした看護実践モデルを保持し孤立の中でも深層的でしなやかな地域看護実践を展開し続けた。

【ケース : 看護師 B 氏】

B 氏は、島嶼ではなかなか看護師らしいことができていないと考えていた。年に数回発生するかしないかの有事以外、ほとんどが看護師としての専門性を発揮する機会がないと認識しており、地域に出向いて家庭を訪問してみたり住民とおしゃべりに興じてみたりはするものの (“内の”立場として自然と地域に入っていく力がある)、島嶼に居る自身を「看護職としての自己」というよりも「(島の出身者である)地元民としての自己」を強く認識していることで看護実践の範囲として捉えることはなく、よって島嶼で看護師としての自律性を発揮できる機会は極めて少ないと考えていた。「地元民としての自己」に過度に傾倒した B 氏の目前に立ち現れた“快適空間としての島嶼”は、ストレスのない心理的安全の支配するものであり、未知のものや挑戦のない世界、すなわち学習の生起しない空間性を帯びるものであった。B 氏の看護職への役割認識のモチ様は、島嶼における相互作用を弱める可能性が考えられた。その一方、B 氏は島嶼の将来を見据え、人々の集いの場を形成できないかと考え始めていた (あくまでこの時点では、看護実践との関連が本人のなかで明確化されているとは言えなかった)。

【ケース : 助産師 C 氏】

C 氏は、結婚を機に一時的に帰島し、当初は長期的な展望を持ってはいなかった。それまで関東圏域の大規模病院で助産師として勤務していた C 氏は、地域が見える (匿名性のない) 島嶼での地域看護実践のあり様に、惹かれていった。看護実践を通して、あるいは私人/個人としての経験から (母として・働く女性として・自身が地域に育てられた経験)、次第に描かれた地域の暮らしに関する

生態系図は、C氏に地域を観る素地を築いた。島嶼に2つしかない産科施設のうち、自らも所属する1施設が休診（事実上の撤退）の危機を迎えることとなった。このとき、C氏は、自らが運営する子育て支援NPO組織を母体とした地域看護実践を率先的に組み立て、実践に移しながら、地域の生態系そのものに影響をもたらすような看護実践を志向するようになった。

2) 統合的看護実践モデル構築への示唆

(1) 看護実践モデルのバリエーションをもたらす小規模島嶼の空間構造

小規模島嶼における各人の看護実践モデルには、多様性をもちつつも、一方で職種の相違だけでは説明のつかない固有な構造が影響を与えている可能性が示唆された。なぜ小規模島嶼における看護職はそのあり様に多様性をみせるのか。解釈を推し進める上で、ひとつ鍵となるのは、島嶼の空間のもつ固有性が、看護実践モデルの多様性を生み出しやすい構造になっている点である。島嶼において、看護職は「専門職としての就業の場」でありながら「一住民としての生活空間としての場（地域構成員の一員）」といったような幾重もの関係性を保有しながら介在することになる。そこでは、看護職は公私の曖昧な境界線上に立たされる。どのように境界を生きるかは、看護職としての自己、生活者としての自己、地域構成員としての自己との“間”で、出来事との対峙や経験を積み重ねながら、徐々に（時に一挙に）島嶼空間との関係性を（再）形成していく。曖昧な境界をもつ島嶼の空間性は、看護実践をデザインする上での多様性（創造性と拡張）をもたらすこともあれば、一方でジレンマを無限に発生させる特性を包含する。それは時に混乱をもたらし、時に成長や挑戦へと導き、時に癒しや沈滞・停滞（膠着）をもたらすものとして看護職の目前に立ち現れるのである。島嶼空間をどのように生きるかを、看護職は問われる。その問いへの（暫定的な）回答が、各人の看護実践モデルを形成していくのである。環境や人といった周辺と自己、自己における“いくつもの私（専門職として/生活者として/ほかの役割）”同士の相互作用によって触発されながら導かれる固有のプロセスである。その人だからこそ生まれたストーリーであり、量産的なモデルでは構築しえない。看護実践モデル形成の動的構造をつかんだうえで、ボトムアップにすくいあげていく必要がある。曖昧な境界性を保有する空間において、関係的存在としての看護職をどう生きるか、その問いへの答えが、その人の看護実践モデルである。以下、看護実践モデルを形成する要素について素案を記述する。

「関係とともに生きる」自然との関係のなかに生きる、他者との関係のなかに生きるという、関係的存在としての看護職の動態が見えつつある。時に従来の看護実践モデルは多

くが棄却（アンラーン）される。

曖昧な境界を保有する空間において、いかに生きるかを時に強く、時に弱く問い/問われ続ける。

数々のジレンマが生じる状況においても、「自分で決めた」という感覚は看護実践モデルの形成において重要な鍵になる。消費する側にも、創る側にもどちらにも立つことができるのが小規模島嶼に生きる看護職である。

「境界線上に生きる」ことで看護実践の拡がりも、混乱も、戸惑いも生じる。

看護職であること、看護職としての役割を保有することは、その人を守り、創るものにもなるし、鎧にもなる。いかに、看護実践モデルを自問し続けられるかが資質として重要な空間でもある。

(2) 組織的な学習モデルの構築

看護職の固有性を活かせる組織へ

時に孤立のなかで、自らのあり様そのものを揺るがされ得る側面が見出された（一ケース）。生活概念としての看護の枠組みは、その密接性から看護職を翻弄や創発空間へと誘う。島嶼における地域共同体のルールや論理といった文化に馴染むことがすべてではない。文化に馴染もうとしないとき、それを支え、ともに考えることができるのは誰か。看護職が苦しみ、もがくなかにある真理がある。文化に馴染むことが看護職に求められるすべてではない。一見、地域に馴染まない見方をする、すなわち相対化を促しうる他者としての看護職が現れたとき、それは地域全体の契機へと転換することができるはずだ。痛みをともに分かち合い、学び、立ち上がる他者（組織）の存在は重要である。支援する者を支援する者・組織が必要である。

今回のケースでも、「支援する他者」の存在は、看護職が島嶼の空間性を認識していく過程において非常に重要な意味をもたらしていた。匿名性の欠如しやすい、つながりの強固な地域において、看護職が地域を自由に語り内省できる環境づくりを所属組織は考え、ともに覚悟をもって看護職を守る存在にならなければならない。

小規模島嶼の看護職に学ぶ学習モデル

小規模島嶼の看護職の「曖昧な境界線をもつ空間において関係とともに生きる」あり方に、その看護職としての本質が含まれていると考えている。社会看護学の学習モデル構築につなげるべく、今後も当モデルの精緻化を図りたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕(計2件)

森隆子：「創発的実践共同体としての島嶼空間」形成のデザイン - 『子の育ち』を支える

ケアデザインの創出事例から - 第 2 報. 第 9
回保健医療研究会 (鹿児島大学・鹿児島県鹿
児島市 2015 年 9 月 12 日 .

森隆子 : 「 創発的実践共同体としての島嶼空
間」形成のデザイン - 『子の育ち』を支える
ケアデザインの創出事例から - 第 1 報. 2015
年次日本島嶼学会奥尻島大会 (奥尻町海洋研
修センター・奥尻郡奥尻町) 2015 年 9 月 5 日

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

森 隆子 (Ryuko Mori)
鹿児島大学・医歯学域・医学系・助教
研究者番号 : 50507126